

## 一本の電話

鳥取県 泉龍寺 住職 三島道秀

仏教の教えに、「愛語」という言葉があります。「愛語」とは、思いやりの心を持ち、相手の立場に立って考え、慈しみの心で語りかけるという意味です。

平成十二年十月、鳥取県西部地震がありました。私が住職を務めているお寺は震源地に近く、本堂をはじめ境内の建物が被災しました。境内の周辺は、墓石や石灯籠の倒壊、石垣の崩壊。お位牌堂には、お位牌や 線香の灰、陶器の破片が散乱していました。

幾度も続く余震の中、私は翌日から片付けをしました。そんな日々を過ごす中、たくさんの方から電話を頂き、お見舞いの言葉と「頑張ってください」という励ましの言葉をかけていただきました。私はその度に「頑張りますから、有り難うございます」と言い、受話器を置いていました。当初はこんなにもたくさんの方に心配していただいているのかと、有り難く心温まる思いでした。

しかし、この有難いお見舞いの電話が毎日続きました。片付け中も、夜も、何回も電話が鳴ります。地震から二週間が過ぎた頃には、心も体も疲れ切っていました。それでも電話は鳴ります。そして「頑張ってください」と言われます。「頑張っています。わかってください……」とも言えず、「頑張ります。有り難うございます」と電話をいただく度繰り返しい、受話器を置くと、涙が出てくるようになりました。いつまで頑張らなくてはならないのか……と。

復旧に向けて、みんな頑張り、目の前の状況を受け止めようと頑張っています。だから「自分も頑張らなくては……」と思うのですが、不安と疲労で涙が出ます。振り返れば、当時私は心にため込んでい

たものがあつたのです。誰にも言えず「只々今の状況を受けとめよう」と一人で頑張っていたのです。

それから月日が経ち、大きな修理はまだ残っていましたが、多くの皆さんの力により、地震の前の生活ができるようになりました。そして、地震から五ヶ月たった三月のお彼岸、ある方から、一本の電話がかかりました。声で、すぐに誰かがわかりました。阪神淡路大震災で自宅が倒壊し、娘さんを亡くされた方からでした。

「和尚さん大変だったね。少し落ち着いた頃だと思い電話をしたよ。被災直後は、電話をしてもきつと大変な状況だろうからと思いつくには、電話をしなかった。遅くなったけど心配していたよ」と。

その声を聞きながら、私は声が詰まり涙が溢れました。その方の思いやりに、言いようのない有り難さを感じました。あの時の声が今も耳に残っています。この一本の電話が私を救ってくれました。その方の言葉は、まさに「愛護」慈しみの言葉でした。辛い経験した人であれば分からない事があります。辛い経験をしたからこそ気づいたことがたくさんあります。私も鳥取県西部地震を経験し、多くのことを学びました。

今も多くの大災害が各地で起こっています。「あなた一人ではない。一緒に頑張ろう」と、多くの方が支援をされています。今、それぞれにできる支援を、それぞれの方法で行う事が求められています。災害にかぎらず、一日一日を頑張り過ぎず、一緒に前に進んでいきましよう。あなた一人ではありません。多くの人があなたを支えています。一緒に前に進んでいきましよう。